

1 作物

項目	作業内容
<p>(1) 麦の栽培管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○麦の栽培管理 ○水田の土づくり <p>ア 湿害対策</p> <p>1 か月予報では、気温は平年より高く、降水量、日照時間は平年並の見込みである（11 月 10 日高松气象台発表）。11 月の降水量は県下で少なく、播種は順調に進み、出芽はおおむね良好であるが、春先の多雨に備えて、ほ場内の明きょ整備が不十分なところは 2～3 m ごとに排水溝を設置し、排水溝が崩れている場合は補修する等により、ほ場外への排水を促し湿害防止に努める。</p> <p>イ 雑草防除</p> <p>播種直後の大雨や、11 月上旬までの早播き栽培では、年内中に除草剤の効果が低下する恐れがある。このため、後発雑草の発生が見られたら、葉齢の小さいうちに占有草種に効果のある茎葉処理剤を散布する。</p> <p>ウ 早播き栽培の追肥</p> <p>11 月上旬までに播種したはだか麦は生育が旺盛となり、12 月ごろからチッ素欠乏による黄化症状（写真 1）が発生し、生育が停滞して収量が低下することがある。対策としてチッ素成分で 10 a 当たり 2 kg を、12 月中・下旬と 1 月中・下旬ごろにそれぞれ施用し、‘ハルヒメボシ’では葉色が SPAD 値 40 を下回らないようにする。ただし、多肥は倒伏を招くことから、葉色等の生育状況を見ながら施用量を調整する。</p> <div data-bbox="871 1223 1398 1576" data-label="Image"> </div> <p>写真 1 はだか麦の黄化症状</p> <p>エ 晩播き栽培の播種</p> <p>はだか麦、小麦ともにやむを得ず播種が遅れ 12 月となった場合は、播種量を増やす。ドリル播栽培での 10 a 当たりの播種量の目安は、適期播種では 8 kg であるが、地温の低下により苗立率が低くなるため、11 月 25 日以降は 5 日遅れるごとに 1 割</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(2)水田の土づくり</p>	<p>増量する。</p> <p>オ 土入れ・麦踏み 土入れは、根際の乾燥を防止するとともに、明きよの補修を兼ねた湿害防止策となる。麦踏みは根が浮き上がるのを防いで凍霜害を回避し、根張りを良くするとともに、徒長や過繁茂を抑え、茎葉を硬くして倒伏を防止する効果がある。 作業は本葉3～4葉期ごろから茎立ち期の土壌が乾いている時に、10日以上の間隔を空けて実施する。土入れと麦踏みを合わせて行うときは、必ず土入れを先にする。</p> <p>ア 有機質資材の施用 腐植や地力チッ素の増加を目的に、堆肥等の有機質資材を施用する。施肥後は耕起して土壌中にすき込み、分解を促す。生わらをすき込む際は、次年度の水稲の根腐れを防ぐため、石灰チッ素(10a当たり20～40kg)等のチッ素資材を施用し、微生物による分解を促す。 なお、堆肥や石灰チッ素を施用すると、次年の水稲が生育過剰となることがあるので、その場合は基肥のチッ素施肥量を減らす。</p> <p>イ 反転・深耕の励行 冬季の休耕田でプラウ等による反転・深耕を行うと、作土層の拡大や微量元素の作土層への移行、透水性の改善が図られ、乾土効果(土壌中の有機態チッ素が乾燥により微生物に分解されやすい形に変化すること)も促進される。</p> <p>また水田雑草に対しては、種子を土中の深層部に埋め込んだり、難防除雑草のクログワイ(写真2)、オモダカ等の塊茎を寒風にさらして、翌年の発生を減らす効果が期待できる。スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)に対しても、翌年の発生密度を減らす効果が期待でき、耕種的防除として有効である。</p>



写真2 クログワイ